

## 時間 (Time)

橋爪 大三郎

時間の社会的特質について、現在のべうる限りをのべよう。

まず、近代の古典的な時間理解の背理を指摘する。ついで、時計の規約的な本性から、時間の制度の存在を探りあてる。さらに、われわれが時間をしてしていることの根拠に、体内ジャイロを仮説し、これを進めて、それが体外ジャイロと複合することで社会的な時間が結節する、とまで考えてみよう。最後に、微小時間の信憑が生ずる理由を推測する。

## 1 時間についてのふたつのアプローチ

【1】時間ははなはだ論じにくい問題である、と信じられている。時間をどのように論じればよいのか、そもそも時間が論ずべき対象(object)であるのかすらも、明確になっていないようである。

本稿の目的は、時間という現象とその制度について、社会的な観点から、ちょうど論じられること・論ずべきことを過不足なく述べることである。時間についてひとつの新しいモデルを示すことができ、時間という難問の解決に多少なりとも前進をはかれたとすれば、目的は達せられたと言えよう。

私が示すアプローチは、これまで暗黙のうちにひとびとを捉えてきた時間についての固定観念からのがれることを、ひとつの眼目にしている。そこで、自分の考えを述べるまえに、従来の古典的な時間理解について、簡単にみておくのがよいだろう。それには、ふたつの典型的なアプローチがあった。ひとつは客観主義的な時間理解とでも称すべきもの、もうひとつは主観主義的な時間理解とでも称すべきものである。どちらも、われわれの経験する時間にとって本質的とみえるところをおさえている。けれども、ふたつを並べてみると、互いに両立しない内容を含んでいるのだ。ここに困難の一端がある。

【2】客観的時間についての信憑は、近代の制度である。われわれはとくに反省しない限り、誰にとっても同じ時間があり一様に流れていることを信じて、疑おうと思わない。

この信憑は、Newton 力学の体系に古典的な洗練をもって表現されている。そこには、羅針盤・時計……といった計量的(metric)な機械装置が普及していった時代の、合理的精神がこめられている。

Newton の体系においては周知のように、絶対的な時間が、絶対的な空間とともに、宇宙に始めからその本質的な形式として具わっているとされた。空間はまさに、三次元のデカルト座標系と対応するのであるが、時間はその第四の座標軸であり、過去から未来へ向かってこの空間のいたるところを横切り、一直線に延びている。すべての物体(あるいは出来事)は、この四次元の時=空間のなかのどこかにかならず、その位置を占める。どの位置を占めるかは、(力学的)自然法則の決定にまかされる。

時間はすでに、Galileo 以来、観測のためのパラメータである。科学的「観測」の視点をとるやいなや、われわれはそれを使いこなしているのである。時間によって、物体(出来事)の観測可能性は保証されるかもしれない。けれども同時に、「時間」それ自体の観測可能性は、ないことになる。これは Newton の体系を採ることの必然的な帰結である。

実証的な自然科学は例外なく、Newton の体系を踏襲しているので、時間について積極的になにか発言するというようなことはない。自然法則の実証を通じて、時間についての前提的な理解も、いわば陰伏的=消極的に再認されるかたちになっている。こうして、実証的な合理性は、時間についての(形而上学的な)問いを遮断するかたちで展開したので、その反作用の如く他方に、時間についての主観主義的な理解を用意することになる。

Newton の体系は明快であった。が、内部に不整合を抱えていなかったわけではない。そう言えるのはなぜか。この体系は、絶対時間・絶対空間の概念を要した。この絶対的な時=空間は、経験に先立って宇宙にそなわり、理性を可能にする純粹形式である。それは端的に想定されただけだ。われわれの実際に経験する世界がこの時=空間とどのような関係にあるかも不明である。後年 E.Mach は、Newton の体系がかならずしも操作的な原理で一貫してしない点を憂慮して、その修正を試みている。

Newton の体系に哲学的な表現を与えたのが、周知のように Kant である。彼の哲学体系においても、時間は先験的なカテゴリーとして、経験可能な対象世界から区別されていた。現象学的な努力はこの区別(経験/先験)を徐々に相対的なものにしていき、ついには時間の根源としての意識に到達していく。この傾向は、時間が観測者と相関的であるとする相対論の成立(絶対的時間の崩壊)と結びつき、純粹に主観主義的な時間理解をつきつめようとする傾向へと発展する。

【3】主観主義的な時間理解に即して言えば、時間とは、時間についての経験である。たとえば、意識はひとつの流れのようであり、それを意識が意識するところに、時間が経験される。

時間はたしかに、精神の活動を通じてわれわれに知られるのである。精神のはたらきがなければ(厳密には)時間もない、と言ってよい。このことを明確にした点で、現象学の実証は正当である。なるほど人間などいなくても、物理学が描くように、ビッグ・バンとともに宇宙は始まり、それから一連の事象が生起し生起し続けて、このいまに至ったには違いない。こうした出来事の時系列は動かさないだろう。しかしそこ(単なる出来事の時系列)には、それを時間として観測し構成する「観測者」がいないのである。時間は、順々に生起する出来事の系列以上の、連続的ななものかである。ある出来事が時間のなかで生起したことが知られるのは、精神の営みに対してでなければならない。このいみで時間は、人間抜きにありえないのである。

「精神」とよばれるほどの高級な活動でなくてもよい、動物だって時間を知っているのではないか、と考えるむきもあるかもしれない。動物の体内時計。いろいろな周期的行動も知られている。けれどもそれらが、天体の運行や気象条件、自然現象の周期性に支配されているにすぎないのだとしたら、そこに「時間」があるとは言いがたい。動物のふるまいをわれわれが見るから、それは時間とうつるのである。

われわれがそこに時間を認めたくするような挙動を動物が示すためには、外界の刺激から独立した生体機構——記憶や「意図」——の介在が必要である。それでもそれは、人間の時間と決して同一ではない。動物の時間は、動物の生理的身体内部のメカニズムである(と想定される)。それに対して、人間の持つ時間は、各人の内部感覚である以上に、ひとびとが共通に従うルールの一つへも発展するのであり、暦法や時計をうみだすような社会的制度に結実する。このように客観的な時間を、動物はむろん知らない。

現象学は、意識そのほかの精神過程の微細な記述に努力を集中し、そこから人間の経験する時間現象の可能根拠を洗い出そうとはかった。だがそれは、結局、人間の時間が制度

(institution) であるという事実を、十分視野に収めていない。それが描く時間は、むしろ動物の時間に似てくる。しかも現象学の文体は、時間(内的経験)についての分析的報告という形をとる。これではついに、時間の客観的様相を描くに至らないはずだ。ヴィトゲンシュタインの、私的言語をめぐる考察が、示唆するとおりである。

【4】時間をめぐる以上ふたつのアプローチは、厳密には互いに相容れないまま、時間についてのわれわれの知識の実質をなしている。このため時間のさまざまな性質は、われわれにはいかにも不可思議と見えてくる。

時間の客観的な存在だけをかたくなに信じつづけることにしても、それなりに一貫できるだろう。(多くのひとは暗黙のうちにそうしている。) だがそれは、時間の客観的な存在の確証でも、なんでもない。かえって、時間が、彼の主観的なこだわりでしかないのではないかという嫌疑を、濃厚にしてしまうのである。

それでは、時間は主観的なものにすぎない、と割り切ってしまうのはどうか? なるほど、時間とは時間についての経験に違いない。けれども、客観的な時間の存在が、謎に包まれた危ういものにすぎないのだとしたら、それについての経験を安易に語ることもできない。私(の主観)は、時間をしっており、時間のなかで生きている。としても、「私(の主観)のなかにあるとき時間が萌した」と考えねばならないのだろうか。あべこべに、すでにどこかにあった時間が侵入してきて、私(の主観)を形づくったとは考えられないだろうか?

こうして、時間に関する二つの見解の対立は、あたかもかの double realityのごとくである。それをどちらかいはうに純化しようとする、と、とり残されかけた片割れがとり憑いて、議論を台無しにしてしまう。

昨今の時間論は、こうした果てしない議論を迂回して、民族誌的なデータを援用しては比較を行う、などの傾向をみせている。この作業それ自体は、興味ぶかいが、時間論のアポリア解消へ向けて進むものではない。

## 2 直線性 vs 三時性

【5】時間について考えにくいのは、時間の実体を想定することに急で、時間の両相性をうまく捉えていないためではないだろうか? ちょうど光が、粒子性/波動性を同時に具えているとみられたと同じように、時間も、互いに相反する(かにみえる)二つの性質からなるのだ、と考えてみよう。さきの二つのアプローチは、それぞれの性質を衝きあてていた。それを時間の、二つの様相と考えるのである。

二つの性質とは、直線的な定向性 vs 三時併存性、である。

直線的な定向性(以下、「直線性」と略)とは、時間が、過去から未来へ向かって、まっすぐ一様に経過していくようなものであることをいう。図示すれば、



のように書ける。近代の客観主義的な時間理解は、まずこうしたものである。このイメージは、数直線(実数)に生きうつしである。線型順序(linear order)をもっていること。(ユークリッドの)距離を具えていること。無数の瞬間(=点)の連続なつながりからなること。……。要するにこの時間は、計量的(metric)である。時間を計量的に純化して意識することは、近代に特徴的だ。

時間を数直線みたいなものだ、と考えると、かつてのゼノンのパラドクス——「飛ぶ矢

は動かす」式の——といくらか感触の似通った不合理がつきまとうようになる。時間が瞬間(点)の集まりからなるのであれば、どのような微細な小期間(区間)にも無数の瞬間が詰まっているはずだ。瞬間それ自体のなかでは、どんな運動もありえないのか? 瞬間から瞬間への移りゆきは、どのように生じつづけるのか? 瞬間が他の瞬間からあくまでも分離されているとすると、われわれは時間(瞬間と瞬間との関係)の存在をどうして知りうるのか? これらは、古代ギリシャ人にとってと同様、われわれにとってもめくるめく問である。ただわれわれは、数直線=実数に対する信憑に支えられるぶんだけ、この問いに呑みこまれずに済んでいるにすぎない。

【6】これに対し、三時併存性(以下、「三時性」と略)とは、時間が、過去/現在/未来の、三つの契機から成立っていることをいう。これも時間の、普遍的な表象である。過去や未来は現在と無関係なわけではない。ちょうどベニヤ板みたいな具合に、現時点に圧着されている。この様子を、強いて図示すれば、

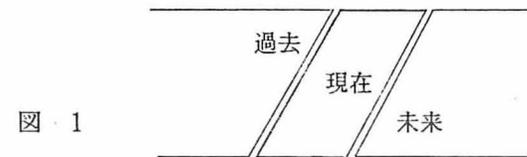


図 1

のようになるだろう。

三時性は、主観主義的に時間を理解しようとする限り不可避なものである。時間が、意識や経験を經由してしられるとしよう。その場合、意識や反省(reflexion)がはたらくあいだには、なにがしかの(客観的)時間が経過するはずである。ともかくそれは、瞬間ではありえない。すると意識や反省——もしそうしたものが可能であれば——は、いくつかの時点にまたがってはたらくことになる。このはたらきがどんなにすばやくても、一瞬間にまで凝縮しきることはない。このため精神のはたらきは、現在で作用しながらも、過去と未来へ枝を伸ばす拡がりである。すなわち、精神のはたらきは、その終わり(始まり)の部分からすれば、始まり(終わり)の部分に過去(未来)なのである。

時間が、ベニヤ板のように、過去・未来にへばりつかれた現在であると考え、やはり困難な問題がいろいろ生じてくる。まず、瞬間なるものはありえないことになる(少なくとも、経験不能である)。また、刻々移りゆく精神の、いくつかの現在が、どう関連しあうのかも、(客観的時間を持ちださないとすると)つかみにくい。

【7】直線性と三時性とは両立しがたいことは、古くインドの哲学的伝統のなかでも気づかれていた。これに触れたものとしては、大乘仏教の大成者ナーガールジュナ(龍樹)の『中論』が有名である。そのなかで彼はいわゆる「三時門破」の説を唱える。いわく、数直線のような時間(刹那滅)を前提すると、過去・現在・未来の三相をそなえた時間は成立しない。したがって、時間意識を担う(とされてきた)我もまた、実在しない(空である)と。

たしかに、直線性と三時性とは両立しないであろう。しかしわれわれは、だからと言って、そのふたつのうちどちらかを時間の性質と認めるべきでない、とは考えない。そのかわりに、そもそも互いに矛盾するような二つの性質が割りふられることになった根底には、いったいどんな事態が横たわっているのか、と考えたいのである。

そこで、さらに議論を進めるため、ひとつのモデルを設定する必要がある。空間論的なモデルである。「空間」とは、ひとびとの諸身体の集合をいう。さきほどの Newton 流

の空間のことではないから注意のこと。)

時間の成立を差し戻すことのできる、もっと単純な世界があるとすれば、それは、出来事(事象)の拡がりである。時間は、事象と事象との関係、とくに、身体と身体との関係のうえに宿る。時間は単に、ひとつの身体に萌すばかりではない。時間について根本的なことがらのひとつ——それは時間が、諸々の身体を一様に捉えるものだ、とみなされる点である。この二つの契機は、いままで来たように、そのまま形式化しようとする矛盾してしまうかもしれない。だが、それには頓着せず、われわれはこの二つの契機を、諸々の身体の集合的な拡がり(空間)のなかに探ってみよう。

空間のなかで、区別しなければならない基本的な概念対は、局所/全域である。

局所的(local)とは、一個の身体にのみ関与することがらをいう。もともと数学用語であったのを、転用したものだ。それに対して、全域的(global)とは、諸々の身体を含む空間全体について成立することがらをいう。これももともと数学用語であった。たとえば、同じく「微分可能」と言っても、局所的な概念と、それらの総体である全域的な概念とを、区別しなければならない。それと同様に、時間に関しても、その局所的な様相と全域的な様相とを区別すべきなのである。これが、時間のモデルを考えるうえで、第一の提案である。

【8】第二の提案は、第一の提案と関係する。

時間のパラドクスをもてあそぶ哲学者も、われわれも、ともすればこれまで、ただひとつの「時間」なるものが存在すると、暗黙のうちに考えてきた。けれども、いまのべた提案によると、時間には少なくとも2つ——局所的な時間と、全域的な時間と——が、考えられてしかるべきなのである。この区別の帰結として当然予想されることは、局所的な時間から全域的な時間を導出できないことである。ある身体(局所)が、諸身体の集合(全域)を明晰に捉えきることはないからだ。

そこで、ふたつの疑問が生ずる。第1に、全域的な時間はどのようにして存立すると理解すべきか、という疑問。おそらくこれは、直接空間に帰属する間身体的な形式と考える以外あるまい。第2に、局所的な時間と全域的な時間とがどう接続するか、という疑問。これについて、時間の脳内モデルを考えてみた。脳内の過程をひとつのジャイロ(回転儀)とみれば、それが、身体外部のジャイロと接続・連動する、と理解するのである。こうして、社会制度としての時間が全域的に成立する、と云う。

これは、現在想定できる、時間についてのもっとも果敢なモデルではないかと思う。このモデルにたてば、いまのべた時間の一見矛盾する属性——直線性 vs 三時性——が、それぞれどのような経緯で結ばれるのかも、整合的に説明できると思う。

### 3 キャロルの時計

【9】時計というものの性質について、理解を深めておくことが、早道だと思う。(われわれはあとで、時計を「体外ジャイロ」として概念化したいのだ。)

ルイス・キャロルは、たいそう時間に興味をもち、時計についても面白いはなしを残している。少し古いのが、それを紹介しよう。

彼が示したのは、「一日に一分遅れる時計」と「止まっている時計」とでは、どちらのほうが正確か、という質問であった。一見これは、考えるまでもない、と思われる。「一日に一分遅れ」程度であれば、実用にさしつかえない。それに百年まえなら、結構正確な

部類の時計であったろう。それにひきかえ、「止まっている」のならば、そもそも時計の役に立ちはしない。

だがキャロルは、しゃあしゃあとこう言う。それはなんと云っても、「止まっている時計」のほうが正確です。なぜかという、一日に一分遅れる時計は、一年で365分(つまり約6時間)遅れ、結局、二年ごとにたった一度しか正確な時刻を指さないわけである。それに対して、「止まっている時計」なら、一日に二回必ず、正しい時刻を指すではないか!

彼の言うことに、計算上なんの間違いもない。だが、どうもおかしい。

そこでさかすか、このはなしを聞いていた少女が逆襲を試みる。「なるほどそうね。でも、その「止まっている時計」がいつ正しい時刻を指したのか、どうやって知ることができるのかしら?」けれどもキャロルは、少しもあわてない。で、こう言う。それはね、その時計のそばにピストルをもって立っていればいいんじゃない。そうして待っていて、ちょうどぴったりその時刻になったときに、ズドンと一発ぶっばなす。そうすれば、みんなにもよくわかるじゃろうて。

【10】このはなしは、ばかばかしくて面白いが、みくびるわけにはいかないポイントもいくつか隠れている。

まず、常識的な事実から確認していこう。われわれの時間理解は、今日、時計ときっても切れない結びつきを持っている。ところで、時計chronometerとはなにか? それは、その名のとおり、時間を測定する機械である。と、こう考えられる場合が多い。それは、間違っていない。われわれの使っているたいがい時計は、そうなのである。けれども、そうした時計が時間を測るための道具として有用なのは、それがどこか別のところにある「本当の時計」の複製品である限りにおいてなのだ。こここのところを見落とすべきではない。そして、「本当の時計」よりも、この複製品は粗雑であるため、早すぎたり遅すぎたりする。それが、「一日に一分遅れる」という言い方のいみである。

キャロルが衝いている点。それは、時計の用法はこの日常的信念(の延長)によっては捉えきれない、ということである。そのため彼は、わざわざ「止まっている時計」をもちだす。この時計(元時計)は、もう壊れていて動かないだけなのだ。それから正しい時刻を知ること、できない。けれども、正しい時刻を知ることができない、という点にかければ、「一日に一分遅れる時計」にしても、実は同じことなのだ。なぜならそれも、「本当の時計」でないから。「本当の時計」だけが、正しい時間を告げることができる。われわれの、道具としての時計が役に立つのは、それが、「本当の時計」に照らしてたとえば「一日に一分遅れる」、などと判っている限りにおいてなのである。

ここでひとつの帰結。われわれの時計のシステムは、(少なくとも)二段階に構成されている。まず、われわれの身の回り品、道具としての時計。これは、複製品であって、「本当の時計」を(蓋然的に)指示する限りにおいて、時間を「計る」ことができる。つぎに、「本当の時計」。この時計の指すのが、正しい時刻である。なぜならば、そのように決まっているのだから。こうして、時計によって測られる時間は、なにがしかの規約的な性質を帯びている。

ヴィトゲンシュタインの論じた言語ゲームのひとつに、メートル原基をめぐるものがあった。この解釈は一定せず、いろいろな議論をするひとびとがある。だがわたしは、この言わんとするところは、こうだと思ふ。すなわち、ひとびとが尺度を用いて、ものの長さをめぐる振舞いをする場合、その尺度は必ずどこかに規約的な性質を帯びる、たとえば、

その端緒に「制定」の手続きを要するのである、と。

キャロルはいち早く、ほぼこれと同じ内容を、パラドクスのかたちで示したわけである。彼の場合、とりあげたのは時計 (= 時間原基) であったが、それが浮彫りにする規約的な性質にかわりはない。

#### 4 時間の制度

【11】さて、時計は時間にとって、どれほど本質的であるか？

この問いは、経済活動と貨幣の関係を問う場合と、似通っているようである。金本位制は、一種の規約には違いないが、同時に自然発生的でもある。それなしでも交換を考えることはできるが、それぬきで市場制度はとうてい円滑に運行しない。

時計は、実用上の必要から生まれた加工品 artifact である。それは、ゼンマイや歯車 (最近のものは、集積回路) などの部品からなる。けれども、時計の本質は、時計を構成する部品のあれこれや、それを支える物質性のレベルにはない。時計の存在理由は、《(もともと自然現象のうちにある) 周期性を、加工品のうえに人為的に生ぜしめる》点にある。そのための工学的な工夫が、振子であり、テンプであり、クォーツ (水晶発振子) である。こうした基礎的な周期運動が、歯車や電子回路を通じて変調され、われわれに見やすいかたち (文字版) に表示される。

懐中時計・腕時計は、ポータブルな形態で実現されることによって、実用的な道具となった。けれども、時間の経過がそこから判読できさえすれば、とくに加工品でなくても時計の役に立つはずである。実際、数多くの民族社会でその用をなしてきたのが、天体の運行であった。誰にでも簡単に目にするのでできる周期運動として、これほど手頃なものがほかにあったらどうか？

したがって、加工品といういみでの時計 (複製時計) は、時間にとって少しも本質的ではない。それは、時間の制度が成立したのちに現れることのできる、二義的な存在だ。もっとうと本質的なのは、「本当の時計」(すなわち、ある時間の制度そのものの成立を支える時計) である。かかる時計の実態は、なんらかの周期運動である。そして、その運動の周期性こそがほかならぬ時間そのものだ、とみなすところに成立つ規約性——これが「本当に時計であること」の本質なのである。

【12】「本当の時計」= 時間原基の制定とともに、時間の制度が始まる。この制定手続きには、若干の微妙な問題が隠れている。

そもそも自然界になんらかの周期運動が存在していること。このことなしに、時間原基はもちろん、そもそも時間の観念自体、発生する余地はないであろう。そこで、自然界には (いくつもの) 周期的に生起する事象の系列がある——これを前提にして、議論を進めよう。つぎに考えなければならないのは、それらの中から手頃なものが選ばれて、「本当の時計」に決まるとはどのようなことか、である。

周期的な出来事——なんでもよいが、たとえば太陽の運行——がある。われわれはそれを、いとまたやすく「周期的」と捉えている。太陽は、毎日おなじように昇ってくる。またおなじように東から西へまわってゆき、没するではないか。だが、よく考えてみると、ある出来事が等間隔をおいて生起する、と判断できるためには、出来事と出来事との間隔を測るものさしにあたるもの——別の周期的ななにか——が必要なはずである。これもやはり周期的な出来事であるとする、周期的な出来事の序列が成立することになる。実用

的な時計が便利なのは、この出来事の序列の中間点を占めたからだ。すなわち、

#### 周期的 (?) な出来事——(複製の) 時計——本当の時計 (時間原基)

のように。この序列の右側の事象は、左側の事象の周期性を測ることができる。だが、当然のことだが、この序列はどこかで行き止まりになる。右端の事象の周期性は、もうなにによっても測られない！ それは、端的に周期的だと前提される以外にない。こうして、周期的な事象の序列全体は、支えをうしなって宙に浮いてしまう。

(序列を線型に構成するから、端点ができる。序列をたとえば環状に構成すれば、端点はない。その場合には、こうした困難は生じないのか？ いいや。時間原基などを設定しない素朴な社会では、循環的な、時間表象の相互参照のもつれあいが、曖昧に時間観念を覆ってしよう。それでも、時間の実態である周期性が結局のところ支えをもちえず宙に浮いているという点に、変わりはないのである。)

おそらく事態はこうなのだ。制度のなかでは、「本当の時計」は最終審級であるが、その外側にまだ、それを周期的と認める暗黙のメカニズムがかくれている。それは、人間の精神をかたちづくる心的作用の一種である。さまざまな事象を「周期的」と認めうるが、それ自体が対象化的に掴まれることがない。このメカニズムに支えられて、時間原基はまさに「正しく」周期的なのである。

このメカニズムは、Hartの「究極の承認のルール」の場合と同型である。究極の承認のルール、すなわちルール原基のようなものがありうるためには、(自体的な) 承認が必要であった (橋爪 [1985a:128-136] 参照)。同様に、どんな時間の制度も、周期的な事象を周期的と認めうるひとびとの能力によってみだされている。この能力はひとびとの不断の遂行的なふるまいとともにある。

ひとびとは、時計や時間の制度の有無にかかわらず、時間を「している」。それは、自然界の周期的/非周期的な出来事についてよく理解し、おのおのの周期のサイズについてもわきまえている、といういみである。もっとも、しているはずの時間についていざ語ろうとすると、彼らは混乱するかもしれない。Aの周期についてはBの、Bの周期についてはCの、Cの周期についてはAの周期を援用して語り、整理がつかなくなる、など。

こうしたとき開始されるのが、時間の制度に違いない。それは自然界に見出される周期的な諸事象の、分類・換算表ないしカタログ——暦法——であるか、あるいは、それら諸事象の根拠づけの序列——時法——である。(このふたつは、時間原基を共有してひとつのシステムに結合することもできる。) 貨幣の場合と同様、時間の制度もその発生の現場を語ろうとすればその語りくちは危うい。危うからぬ範囲で、つぎのことは言えよう。

ひとびとが、経験を通じてしている周期的な事象のなかから、特定の事象の周期性をひとつ選び出し、時間の規準におくとしよう。すると必ず、ある転倒が生じないわけにはいかない。選び出されるやいなや、その事象の周期性は規約としての性質を帯び、時間の原基 (時間に関わる言語の用法やふるまいの規準) となる。いままでは、さまざまな事象の周期性のなかに時間は拡散していて、ひとびとはそれを暗黙のうちにしていうことでよかった。しかしこれからは、時間は、時間原基に集中的に関係づけられる。時間原基によって測られるもの——それこそが (本当の) 時間にはかならない。さまざまな周期的な事象が時間原基とどのように結びつけられるかを知らなければ、時間の制度のもとで時間を知っていることにはならなくなるのである。

【13】前節であきらかとなったことを、要約しておこう：

- ①周期的な事象が根拠づけの序列をなすとき、時間の制度（時法）が成立している。
- ②序列の終端に位置する事象は、時間原基＝本当の時計である。
- ③時間原基の周期性は、規約的な性質のものであって、他の事象によっては根拠づけられない。
- ④時間原基の制定が可能であるためには、時間の制度に先立って、ひとびとがすでに「時間をしてしている」ことが必要である。
- ⑤時間を「している」とは、遂行的な事態であって、なんらかの周期的／非周期的な出来事のうちに表明されたりはしない。

【14】そこでわれわれが問題とすべきは、時間を「している」ということの、内実で時間の制度を基礎づけるはずの、基底的なメカニズムである。このメカニズムに検討のメスを加えよう。（これをこれ以上分析したりせず、「時間ゲーム」に内属するひとびとのふるまいとして、単に想定し、そこから議論を出発させるやり方もあるかもしれない。だが、われわれはそこに、もっと単純なモデルをたててみたいのである。）

先回りして、結論からのべておこう。われわれは、時間を「している」ということのモデルとして、生体内のジャイロ機構（以下略して、体内ジャイロ）と生体外のジャイロ機構（以下略して、体外ジャイロ）との噛みあわせを、考えたい。そしてここから、時間についての表象や時間の制度（暦法・時法）の出現をあとづけたいのである。

ジャイロ（回転儀）とは、地球ゴマのように、系の相対的な独立性を保って周期運動するメカニズムをいう。われわれの生理的身体内部にそれを想定するとすれば、精神活動を支える大脳の神経回路、ということになろう。ただ、現在の神経学の水準では、神経回路と精神機能とのつながりについてほとんど何もわかっていないに等しい。それにまた、人ある。もちろんこの事態は、時間の制度によって解明されたりしない（Cf④⑤）。ぎゃく問的なものである時間の特性が、動物の特性である神経回路によって尽くされるはずもない。そこで、そうした粗雑な比定にこだわらず、体内ジャイロを、単に精神機能に下属する周期性とだけ考えておいていただきたい。

【15】ジャイロモデルが対抗することになるのは、時間に関して知覚中枢なし意識中枢がある、とする考えかたである。この説——時間中枢説——は、現象学など多くの哲学的な時間理解の範型となっているようだが、問題がある。すなわちこの説は、時間がしられるにいたる機制を解明しようとするはずなのに、その前提にいつのまにかわれわれのしている時間（の制度）をすべりこませるかたちになっている。

時間中枢説は、ある事象における時間の流れ（ $X \rightarrow X' \rightarrow X''$ ）とそれをしる中枢（a）との間に、つぎのような対応がつくことを想定している：

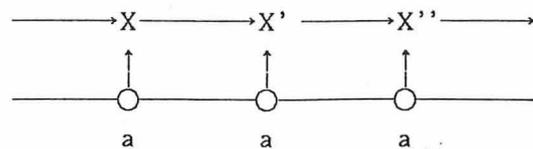


図 2

これは、ある局部の同一性(identity)が、ある事象の差異( $X/X'/X''$ )を経験する、という図式に等しい。

こうした図式が、時間をすることのモデルであるためには、いくつもの前提が必要ならずである。まず、問題の差異が、まったく別々の事象の相互継起だとすると、そこに時間の流れが認められる理由はないだろう。だからその差異は、ある事物に生じた変化か、あるいは少なくとも、部分的な同一性を隠した部分的な変化でなければならない。（なにごととも一切変化しないのであれば時間は介在できない。）ところで、この同一性は、実は中枢aが想定したものである。つまり、対象ないし現象に認められる同一性は、中枢の自己同一性を裏打ちにして成立しているはずである。

そこでつぎの問題は、この自己同一性をどう考えるか、である。ひとつの極端は、中枢が完全な自己同一性のみからなる、すなわち、時間中枢は時間が経過してもまったく無変化である（ $a = a = a$ ）、と想定する場合であろう。なるほど、中枢はいつでも現在にあって、変わることなく時間を能識しつつある。これを抽象したと考えれば、この想定も妥当にみえる。けれども、現在は実は、他の現在ではないことにおいて現在なのである。現在  $X'$  に直面している中枢は、自分がもはや（まだ） $X$  ( $X''$ ) には直面していないとわきまえることによって、現在に位置している。このような、非現在に関する付加的情報（記憶）は、現前する現象の系列( $X/X'/X''$ )のなかには含まれていない。これなしで中枢が時間をする、と結論するのはむずかしい。おそらく、 $X \rightarrow X' \rightarrow X''$  が時間の経過であるというため、中枢aの背後に“時間”を密輸入せねばなるまい。

そこで、もうひとつの可能性。中枢は直接現象に対峙するのではなく、精神現象にのみ直面する、と想定する場合。さきほどの図2は、精神現象（脳内過程）の模式に読みかえられる。（これを、中枢がまったく自己同一的であるのではなく、一部は可変的だと、さきの想定を修正したものと解してもかまわない。）さまざまな出来事は心的作用のなかで印象として積み重なり、 $X \rightarrow X' \rightarrow X''$  の系列をなしていよう。この場合には、しかし、問題はふりだしに戻ってしまう。この過程のなかで、まさに時間にむきあう自己同一的な部分（a）は、どのように時間をするにいたるのか？ ……

【16】以上のような勅理のよってきたる所以は、図2に示す時間中枢説が暗黙の裡に採用しているふたつの前提に求められる。その第1.時間が経過するその場所（ $X \rightarrow X' \rightarrow X''$ ）と時間をする中枢（a）とをまったく別々のレベルに設定すること。第2.構成されるはずの理念的（数直線的）時間を、議論に先行してどこかに設定すること。このふたつの前提はどちらも、なしですませることができる。そして、そうすれば、以上のような勅理をさけることもできる。われわれが採用するジャイロモデルは、そうしたものだ。

まず、単体のジャイロがどのようなものか、図式的に説明しよう（図3）。

ジャイロ（神経回路）の模式は、第1の前提を否定している。そこでは、時間をする作用としられるべき時間が流れる場所とが区別されていない。また、第2の前提も否定されている。このジャイロの円環は、理念的な時間のように伸びひろがるわけではない。ただ時間をするという出来事が生じるための土台を提供しているだけである。またここで、時間をする不変の中枢なるものはない。時間をする場所は、時間の経過とともに、この円環のうえをつぎつぎと移動していく。

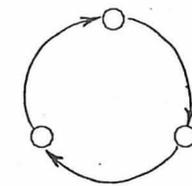


図 3

われわれの理解によると、さきの時間中枢説の模式(図2)は、うえの単体ジャイロに等しい。単体ジャイロにおいてただ、中枢の同一性を想定すればよいのである。すると、ほぼ図2のような時間表象が描かれるはずである。(数直線に位相同相な、時間の稠密性・連続性が導かれる機序については、後述。)けれども、おなじくわれわれの理解によると、時間についての積極的な観念がえられるためには、たったひとつのジャイロではなくて、複数のジャイロが組あわせる必要がある。このいみで、単体ジャイロモデル(したがって時間中枢説)は不適當なものである。

【17】われわれは時間についての制度や既存の観念に浸されているので、ついそれを前提に議論を始めやすい。それに対して踏みとどまるため、すべてが出来事(事象)であるだけで、想定することにしよう。事象のあいだには、生起の前後関係が部分的に定まっているだけであって、(全空間に行きわたるような)時間はどこにも存しない。

時間は、事象ではない。時間は、事象と事象との間に想定されるものである。だから、事象を想定しただけでは、時間は想定されない。時間は、事象に対して差分(difference)の関係に立つ、一種のメタ構造である。

このことの含意をさらに追ってみよう。時間が事象の差分であるとは、時間が事象と事象との(前後)関係にはかならないということだ。それは、先に起こったある事象と、後で起こった別の事象との関係である。ところがこの関係は、いったいどのようにして可能なのか? すでに生じた事象は、出来事としてはたちまち雲散霧消してしまい、後続の事象のなかに現れることができない(刹那滅)。事象は互いに外在しあうばかりで、関係がつかないではないか。たしかにそうである。よって事象は、その残響(像)によって他と関係するしかない。

精神活動を支える神経回路の基本的な性能は、事象の残響(像)をうる点にある。記憶や想起など複雑な精神作用は措くとしよう。より単純な、知覚について考えてみても、それがいくつかの事象の並行関係(空間性)や前後関係(時間性)を処理していることは、明らかである。時間的前後関係の知覚(例:ホタルの尾の光が明滅しているナ)は、先行する事象の像/後続する事象の像が神経回路のなかでそれぞれ保蔵され、照合される場合に生じるだろう。先行する事象の像は、その分だけ神経回路のなかを余計に経めぐらねばならない。(このとき、神経回路(ジャイロ)が余分に回転したという、二次的事象(出来事)が生起している。)

知覚は、もっとも単純な場合であっても、すでに十分複雑な構成をそなえている。知覚は時間性を下敷にしているのだから、そのなかで時間を意識することができる。けれどもいろいろ反省を試みた結果わかるのは、そこで意識できる時間が、決して点の如き瞬間としての今(現在)でもなければ、なめらかな流れのごとき時間の移りゆきでもない、ということなのだ。特になにも気にしないときには、時間は流体のようにさらさらと素直なものにおもえる。けれども、いったん時間を掴みとろうとすると、時間は武骨なそのもうひとつの貌を現わす。時間は、掴もうとする精神の働きをのがれて折れ曲がったり、淀んだりする。これが今だ、あるいは、時間を掴んだ、と意識しようとしても、それをするのに時間がかかってしまい、掴まれるその時間をとり逃がす。だからわれわれが意識することのできる時間とは、時間の制度が教えるような、数直線の図式をあてはめられた時間ではない。現在とも、過去とも未来ともつかぬもの入り混じった、どよめきの時間である。

【18】このようである理由を、つぎのように考えることができよう。神経回路上におけ

る精神の活動は、それが活性を帯びて(active)いるかぎり、端的に現在のものである。ゆえにそれは、いついかなる場合でも、現在に立脚している。けれども、精神機構のある部位の活性は、神経回路のうえを他の部位へと波及していくことができる。だから、ある部位の活性(現在)は、そのまま他の部位の活性(もはや現在ではない事象、あるいは、過去)の像でもありうることになる。これを根拠に、神経回路は、知覚——すでに生起した事象についての像の構成——を営むのである。

こうしたわけであるから、精神の活動がもたらす時間にあっては、過去と未来とが現在のなかで相互に包絡している。これは、はなはだ矛盾した言い方のようなのだが、けっしてそうではない。精神の活性(現在)からみるならば、知覚されるものは必ず過去に属する。だから、現在は過去につきまといわれている。いっぽう、同じことをぎゃくにふまえることもできよう。知覚や意識(=内的知覚)が確実に掴むもの——これを基準にすると、精神の活性はつねにそれをほみ出した場所(未来)に帰属する。それはたしかにいま働いているとしても、いま掴まれるものの中にはみつからないから。いま働いている精神の活性を掴みとれないわけではない、けれども、掴まれたときにはそれはあいにく、いま働いていた精神の活性になってしまっているのであり、しかもそれを掴んでいる精神の活性が別に働いているではないか! 精神の活性は、永遠に能動的なるものとして、知覚や意識の確実な対象となることをこのようにすり抜けていく。そしてこのすり抜けは(思弁のなかで明らかになるとしても)掴まれない。だから、「自己意識」とよびならわされてきた精神の自己把持の存する場所は、過去である。ここを確実な基準にとれば、活性そのものである精神は、つねに未来にまといわれてあると信じられるしかない——。

【19】精神において、過去と未来とが現在において相互に包絡しているというのは、以上のようないみである。それらは、われわれのしる時間の制度の諸契機をなしている。過去/現在/未来が、単離できる実体でなく、時を構成する契機にすぎない、ということであれば、すでに現象学的な伝統が繰りかえし指摘してきた。だがそれは、要するに、対立概念が互いに依存するという発想である。ここで考えたいのは、それと別のことである。

時間は、事象からの差分である、とのべた。そうやって紡がれる観念としての時間の側からみれば、事象は時間のなかに配列されるようなものである。事象が客観的なものであり、時間が主観的なものであるならば、(あるいは、時間中枢説をとりうるならば、)この想定に問題はない。けれども、精神(の活性)もまた事象(の一特性)であるために、観念として時間を想定する立場は脅かされてしまう。なぜならば、精神のどんな作用に対しても、それを過去と断ずる作用が新たに後続していくから。これをあえて図解すれば、つぎのようである:

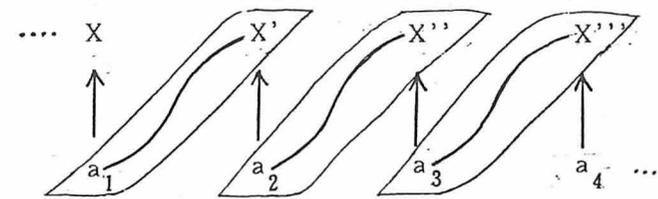


図 4

この図が示すのは、神経回路のうえで、活性を帯びた部位がつきつき無際限に交替（後退）してゆく、という事態である。精神の活動がこのとおりであるとすれば、そこでは、純然たる現在が経験されることはないだろう。また、数直線が表象させるような、限りなく微細な時間の推移が経験されることもないだろう。時間の明瞭な一単位といったものはないが、しいて言えば、それは少なくとも、過去から現在を経て未来にいたる紡錘のようなまとまりである。

さて、精神の活動は、このようにのこるくまなく時間にいたる萌芽を宿している。これは、精神が時間をしていっていると言えることの基礎的条件である。ここからどのようにして時間の観念が生じ、ひとつとを一樣に支配する時間の制度が組みあげられるのかを、考えなければならない。時間の制度のもとでは、いまのべたような時間の経験がその配列を組みかえられ、まったく別様の様相のもとに現れる。たとえば、図4に示されたような事態は、つぎのように組みかえられる：

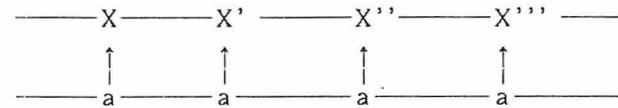


図 5

図4に示された事態（時間にいたる萌芽）は、単一のジャイロを前提にして描かれたものであった。それに加わる変形は、もう単一のジャイロによっては捉えきれない。われわれのしる時間——時間の制度一般——へとさらに追討するため、われわれは、ジャイロの複合が与える効果に目をむけよう。事象の差分であるとされた時間が、どのように集積し変容したところに、時間の観念が結ばれるのか？ 現象学的記述の限界を越えてすすみ、社会的制度としての時間の成立そのものを論ずるためには、複ジャイロモデルを援用すべきだ、というのがここでの主張である。

## 6 体外ジャイロ／体内ジャイロ

【20】時間の観念にとって最も本質的なのが、周期性(periodicality)である。周期性によって、時間は、ただ単に過去から未来に延びひろがるだけではなく、はっきりとした目盛りを自らに刻むことができる。

ところで、(本当の)時計を論じた箇所(【12】節)ですでに触れたように、ある事象の周期性をいうのは、実は単純でない。普通に考えられた周期性は、ある時間の成立を前提にした測定の結果、すなわち、周期性=等時性である。しかるに、時間の成立は時間原基——端的に周期的であると規約的に定められた事象——に負っていた。だから、この(始源的な)周期性は、等時性の知識に先立ってひとつとにいられていたものでなければならない。では、このような周期性は、どのようなメカニズムを通じてしられると考えられようか？

周期性が経験されるためには、それ自身循環的(再生的)な現象がなかなければならない。循環的とは、あるいみで同一な事象が生ずることをいう。同一な事象があるかどうかは、問題である。常識的に時間・空間を前提すれば、同時に同じ場所で2つの出来事が生ずることはないのであるから、すべての出来事は互いに区別できることになる。だから

ある事象が再び別な場所・時刻に生じるといふことは、いみをなさない。——そこで、循環的であるとは、事象の厳密な再生ではなく、事象の生起のあるパターンが類似・反復していることをいみするとしなければならぬ。

周期性の経験の一例として、軒先からしたたり落ちる雨のしずくをとりあげよう。しずくは、見つめるうちにも、ポタリポタリといつまでも繰り返され落下する。どのしずくもむろん、別々のものだ。が、だからこそ、ア、またしずくが落下する、ととらえられるのである。ここで必要なのは、しずくならしずくという事象のカテゴリーである。このカテゴリーに即して言えば、たしかに同一の事象が再び生起したのだ。ただその背景をなす一連の事象——風の吹きぐあい、軒先をたたきつける雨音のぐあい、私の歯痛のひどさのぐあい、……——に照らして、それらは区別されるのである。

【21】周期性を最も純粹に経験させてくれるのは、おそらく音楽であろう。その律動的な音響はいくつものレベルで、循環的なパターンを含んでいる。そしてわれわれは、音響に注意を集中するあまり、音響の反復を相対化するはずの背景を見失ってしまう。

音楽の経験は、時間にいたる萌芽を描きだしたわれわれのさきの論旨を補強してくれるであろう。物理的ないみで、ある時点に鳴りひびいている音は確定できる。だが、われわれが聴いているのは、そうした音ではない。われわれは、すでに鳴りひびいてしまった音をもたしかにいま聴いているのであり、これから鳴りひびくであろう音さえも聴いているのである。(これを、単なる回想と区別せよ。)不在の音を聴こうとする動機づけ——音楽的緊張——が、音楽の内部で生産される。音楽を聴くという経験のなかで、一時点(瞬間)としての現在はまったく乗り越えられている。音は、過去から未来にいたる紡錘のなかで、鳴りひびくのだ。もしもこの点を考慮にいとすると、律動にせよ、旋律にせよ、およそ基本的な音楽の形象が説明のつかないものになる。

言語を受話し、また発話するという経験に関しても、同様なことが言えるはずである。われわれは文を聞いたり話したりするのであって、一音々々を聞いたり話したりするのではない。ましてや文は、それが埋めこまれるいっそう大きな発話の文脈とともに聞かれたりもするのである。

こうしたことが可能であるのは、精神の活動が、外部からの刺戟にいちいち緊縛されておらず、かなり自律的な内的秩序のもとに営まれるからにちがいない。精神の自律的な活動は、神経回路の自律的な作動と相即している。神経回路は、知覚に関しても運動に関しても、多彩な常同反応(ルーティン)のレパートリィをそなえていよう。失行や失認などの諸症状がその一端を垣間みせてくれている。ただ、現在の知識の水準では、どのようなルーティンがどのように精神を組みあげているかについて、めぼしいことはほとんどにも判っていないと言ってよい。精神の活動の内部にも、いくつも循環的な現象が見つかること、そしてそれらは、神経回路の性能に根拠を置いていること——この程度の想定ならば無難である。

【22】音楽と言語に共通するのは、人為によってひきおこされた出来事であるということだ。ひとは、他のひとが発生させる事象(他者の挙動)に注意を集中させることで、それ以外の外界の刺戟から遮断される傾向があるらしい。

音楽が含む律動的な周期性は、自然界のものではない。ひとがことさらに生みだしたものの(表現)である。それは、神経回路内部の循環的な現象に根拠をもっている。ひとつとは互いに他に注意を集中し、こうした特異な周期性をかぎつける(mutual tuning in)。音楽の理念性と形式性は、このような間身体的な相互性によっている。

音楽の律動的な周期性について、もう少し考えてみよう。

音楽の律動的な周期性は、時間に関係する社会形式として、身体に規範的な作用を及ぼす。もしもその周期性が、生理的身体そのものに付属する周期性（たとえば心臓の拍動のたぐい）であったとしたならば、それは社会形式でなく、まして規範的な作用の源泉でもないだろう。けれども、音楽に特徴的なのは、“調子が外れる”“タイミングが狂う”といった観念である。そこには、音楽が保守すべき境界が示されている。身体は、音楽に内属しようとする限り、その枠内に身体の活動の様態を調律しなければならない。音楽の律動は、生理的身体のどんな活動や周期性をもチェックするような、理念的な形式性をそなえている。ただし音楽は、（狭義の）ゲームがそうであると同様に、始めと終わりのある一過的な営みであるので、社会を普遍的に蔽う時間の制度となるための資格を欠いているのだが。

周期性をチェックするのは、別の周期性である、と考えられる。

太鼓を叩くなどして音楽の律動を実現しようとする場合、上腕部や手首の振子運動であるとか、太鼓の皮の反撥であるとかが協働して、周期的な音響をかたちづくるであろう。けれどもその周期性は、そのまま完全な律動であることができない。身体の疲労や外部の攪乱に抗して、より上位のレヴェル——音楽を音楽として聴く理念的な作用のレヴェル——で調整される必要がある。ひとは音楽を聴き、律動にさらされることで、こうしたレヴェルをひそかに形成するのだ。これは、神経回路の周期性をその基盤にしているにちがいない。

【23】自然現象であると身体内部の事象であるとを問わず、周期性はおおよそジャイロ・メカニズムをその実態としている、と考えてみよう。つまり、ひとつの周期性の背後にひとつずつのジャイロ（回転子）を想定するのである。すると、ある周期性をチェックする別の周期性（前節参照）を考察するには、あるジャイロに噛みあう別のジャイロを考えればよいことになる。これすなわち、複ジャイロモデルである。

ジャイロは、相対的に独立した系であって、周期運動をするものである。当然どのジャイロも、固有周期をもっている。（まだわれわれは制度としての時間を手にいれていないのであるから、この固有周期は測られたものではない。ひとまず想定されたのである。）

ジャイロは周期運動それ自体なわけだから、じぶんの周期がどのようであるのか、じぶんでは掴むことができない。けれども、他の周期運動に遭遇し、それと噛みあうことによって、その事実を掴むことができるであろう。ジャイロは互いに照らしあう。

このメカニズムを例解するため、ジャイロを歯車にみたててみよう。歯車の歯数は、固有周期を表す。複ジャイロモデルは、噛みあった歯車によって表現できる（図6）。

噛みあった歯車は、互いに干渉して、新しい周期性を示す。これは、歯車と歯車とだけの間に生ずる、特異な現象である。いま、2つの歯車A、Bがあるとし、おのおのの歯数を8,12としてみよう。これが噛みあって回転するならば、歯数の最小公倍数24ごとに同じ歯と噛みあうことになる。つまり、歯車Aは、3回転ごとに、歯車Bとの関係において、特別な状態にはいる。ここから歯車Aは、じぶんが固有周期をもっているのではないかという可能性に気づくのである。

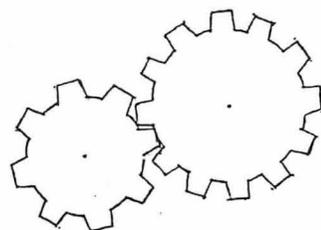


図 6

あるジャイロがあるとしよう。その周期性を判定するのは、まずもって別のジャイロである。ジャイロ同士は干渉しあうことにより、互いに他を判定できる。みずからの周期性を問題とできるのは、そうした相互交渉を通じて後のことにほかならない。

ゆえに、つぎのように推測できる。われわれが時間をしているとするれば、それは、われわれの精神活動自体がある周期性を刻んでいるから、すなわち、それが神経回路のうえなるジャイロとともに営まれているからにはほかならない、と。われわれの精神はその事実をじかにみとめるわけにはいかないが、さまざまな現象の周期性に気づきうることを通じて、その事実をおのずから露呈するにいたるのである。

【24】われわれの精神の活動は、神経回路の複合によって編みあげられている。そして神経回路は、随所で神経ジャイロとして働きうるであろう。

残念なことに、現在の人工知能研究ははなはだ幼稚な段階にとどまっている。推論や思考など、多少とも「高級な」精神活動が、実際どのような回路上で遂行されるのかについて、何も教えてくれない。そこで、推測をめぐらしてみる。十分予想されるのは、それが単純な周回路でなく、つど径路と延長とを変化させるような不規則な回路であろう、ということである。すると、そこから直接ジャイロの周期性をみてとるのは、容易でなさそうだ。けれども同様に、十分予想されるのは、推論や思考のプロセスが、あるまとまりをもったいくつもの作業ステップ（いわば、サブ・ルーティン）からできあがっていることである。同じ作業ステップが、いろいろな思考のなかに繰りかえし登場する。そこに常同性・反復性がみとめられれば、それが神経ジャイロとして働くと考えるのは自然である。

このようなぐあいでは、精神活動を支えて作動しつつある神経回路の総体は、多数のジャイロの複合とみなされる。それらは、噛みあった多数の歯車のようなものである。ただ、歯車と違うのは、神経ジャイロが活性を帯びたり失ったりしながら、神経回路上で生滅を繰り返すことだ。

精神の活動は、時間について考察するという視点からすれば、まさしく複ジャイロモデルによってとらえられる。精神は、あるときはこちらのジャイロから、あるときはあちらのジャイロから、おのれの周期性をさぐりつづける。こうした過程を通じて、精神はつねに「時間をしている」といえる状態にある。けれども、これがただちに客観的な時間に結ばれることはない。

【25】複ジャイロとしての精神が、それ単独では客観的な時間を結ぶにいたらないとすれば、その理由はなにか？ それは、不決定性のゆえであろう。

精神の活動は、身体の内側で営まれている。さて、もしも身体が外界と切断されているならば、精神の複ジャイロも、まったく孤立した系となろう。ジャイロは互いに噛みあって、そこから相手の周期性をよみとろうとするはずである。だが、こうした相互連関のうえに組まれる同時決定的な系は、不決定(undeterministic)である。この相互連関から定まるのは、(外界の)時間の進行とかわからない、ジャイロ周期の相対比にすぎない。

神経ジャイロの周期は、(生化学的な)反応条件に依存しているにちがいない。ひとつの神経回路を刺戟/反応が一巡するには、一定の反応段階(反応時間)を要する。その周期は、件の反応条件に応じて変化するだろう。実際、われわれは経験する。高熱に見舞われたとき、あるいは、何ごとかに熱中しているとき、時間の進行が通常とは異なったテンポで感じられるのを。このことは、つぎの事実を推測させるに十分である。——精神の複ジャイロは、外界の現象の周期性に準拠し、それと接続している。われわれの時間感覚は、それによって支えられている。たしかに、精神の複ジャイロは、相対的に独立した系

をなしているかもしれないにせよ、孤立した系であるとまでは言えず、外界と接続を保っている！

高熱の結果、神経ジャイロの反応性が一斉に何%か高まったとする。だが外界の現象の周期性は、むろん変化しない。そこでそのときには、こう感じられる。——「ああ、頭がガンガンする。それにしても今日は、なんて時間がゆっくりたつんだらう?！」

われわれは、時間についての(制度的な)知識をもっている。それによれば、時間の流れは不変である。ある日きゅうにゆっくり流れたり、あべこべにはやく流れたりすることはない。だから、高熱の日にはこう感じられてもよさそうである。——「ああ、頭がガンガンする。それにしても今日は、なんて頭がすばやく回転するんだらう?！」 けれども、実際にはそう感じられはしない。なぜならば、はやく回転しているのは、時間を感じる当の神経回路なのだから。神経ジャイロと体外ジャイロとは、非対称である。時間をしり、感じるのはあくまでも神経ジャイロなのであって、その逆ではない。

【26】こうして、時間についての考察から、ジャイロには3つの種別を区分すべきであり、それらが階層をなすと考えるべきことが明らかになった。——すなわち、神経ジャイロ / (狭義の) 体内ジャイロ / 体外ジャイロ。

神経ジャイロとは、精神の活動を支える複ジャイロである。これを織りなす多くのジャイロは、どこが終点ということなく噛みあって、連結したひとつのネットワークをかたちづくる。

(狭義の) 体内ジャイロとは、身体上にあるジャイロのうち、神経ジャイロ以外のものをいう。心臓の鼓動であっても、性周期であっても、あるいはいわゆる体内時計であってもよい。これらは、当人の神経ジャイロにとっては直接知覚可能であるが、他者には一般に観察可能であるとは限らない。他者に観察可能である場合には、彼にとって体外ジャイロとなる。

神経ジャイロと(狭義の)体内ジャイロをあわせ、(広義の)体内ジャイロといおう。

さいごに、体外ジャイロとは、身体の外にある一切の周期的現象をいう。体外ジャイロはほとんど無数にありうるが、神経ジャイロの場合と異なり、その大部分は互いに無関係である。それらが(あまねく)関連づけられるとすれば、それはある身体の神経回路のなかにほかならない。

以上のジャイロが噛みあう様子を模式的に示せば、つぎのようである(図7)：

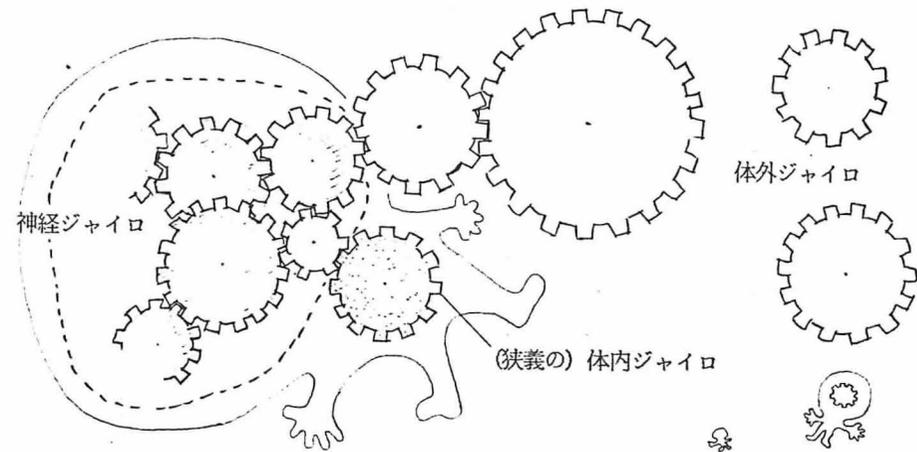


図 7

## 7 間身体的な了解項としての時間

【27】時間をめぐるわれわれ人間の経験の総体をモデル化するのに、体内ジャイロと体外ジャイロの複合をもってするならば十分であることが、いまや明らかとなる。

時間をしる能力は、体内ジャイロの性能である。けれども、この能力だけでは、社会現象としての時間——時間の制度のなかでえられる、知識としての時間——にたどりつくことはできない。身体は相互に外在する。ゆえに、特定の身体に帰属する体内ジャイロも、相互に外在する。(体内ジャイロが相互に関連する場合がありますとしても——たとえば脳波を診察する医師——、そのとき一方は他方にとって、体外ジャイロとしての資格で問題となっている。) 両者が関連し、同じひとつの時間のもとにある(という信憑がうまれる)ためには、体内ジャイロがいっしょに噛みあうことのできる体外ジャイロが、なければならない。

体内ジャイロ(精神の複ジャイロ)が孤立してあるだけでは、時間表象が確定しないことをのべた。そして実際われわれが、体外ジャイロと関連しあいながら、時間感覚をえていることをみた。体外ジャイロ/体内ジャイロの噛みあいは、非対称(つまり、体内ジャイロが一方的に体外ジャイロを読みとる関係)である。この非対称性のゆえに、体内ジャイロに結ばれる時間表象は、体外ジャイロに対して確定するのである。(体内ジャイロ・体外ジャイロを含めた事象の総体を1個の孤立系とみなせば、時間はやはり不確定であると考えうる。すべての出来事の生起するテンポがだんだんはやくなるとしても、そのことに気づきうるだろうか? だが、この不確定性は、時間の社会的な確定に関してなんら影響しない。つまり無視してよいのである。)

いま、2つの体内ジャイロ(A, B)が、同一の体外ジャイロ(C)に結びついている場合を考えよう。(この言い方は、むろんかなりの危うさを含んでいるが、しばらく看過してほしい。) この様子を、簡単に図8に示しておく。ジャイロA, Bは、どちらもジャイロCを知覚するが、直接互いには噛みあっていない。また、間接的に噛みあっているともいえない。なぜならば、体内ジャイロと体外ジャイロとの関係は非対称であるので、ジャイロA→C(B→C)へと周期性が反響することはないからである。

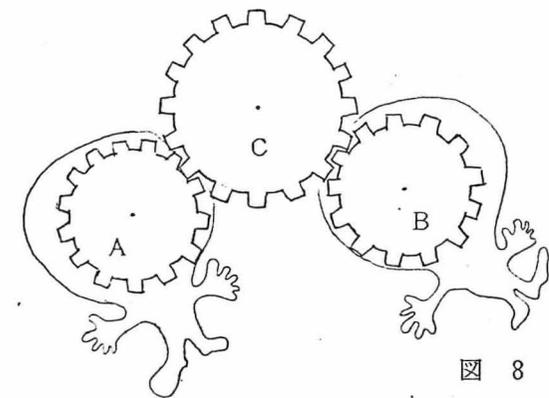


図 8

ここで、時間の知識・時間の制度についての根本的な問題を、つぎのように設定できるであろう。すなわち、ひとびとはおのおのの体内ジャイロ(A, B, ……)にもとづいて(だけ)時間をしっているとす。そのとき、いったいどのようにして、ひとびとを一様にとらえる(社会的な)時間の観念が生じることができるのか?

この疑問は、哲学的な伝統のなかでは、現象学的な時間意識から、普遍妥当する客観的時間への有無をいわさぬ跳躍にみえる。そして、それを理路において架橋するのは、そもそも不可能に映るかもしれない。

【28】自分が（あるいは、自分だけが）時間をしている。——このことをまず確実なことがらと思ひなして、そこから時間の観念を疑うというのが、ひとつの常套である。けれども、前者（自分が時間をしていること）は後者（時間の観念の成立）よりも、確実なことなのだろうか？

自分が時間をしている、というその知り方が問題である。われわれは、時間の使い方——もう少し正確に言うならば、時間に関連する言語表現の仕方、時計の使い方、約束の仕方……——をしているのだ。時間は、棒きれや石ころのように、その辺に転がっているわけではない。時間それ自体という出来事があるわけでも、時間という名前のア・プリオリな範疇があるわけでもない。だから、時間の使い方と切り離されたところに、時間をしているという体験があるわけではないのである。そして、時間の使い方をしていてというみで時間をしているとは、結局われわれが、体外ジャイロを織りこんでふるまうことができる（現にふるまっている！）、ということにはかならない。

では、体外ジャイロ——身体の外にある周期的事象——を織りこんだふるまいとは、どのようなものか？

自然界にあって身体との関与の及ばぬ周期的事象といえば、地球の自転（あるいは、それに起因する仮象である、太陽の日周運動）をまずあげるべきだろう。われわれは昼夜の交替を当然のこととし、それを前提にして行動する。狩猟にせよ、農耕にせよ、そのほかの活動にせよ、太陽の日周運動に深く規定されている。このみで、太陽の運行こそは最大の体外ジャイロだと言ってよいのである。ただし、ある社会の生活形式の全貌がどのようにこれと結びついているかは、相当に複雑であって、見通しにくい。

【29】そこで、ごく単純で典型的な一例として、「約束」をとりあげよう。約束は、われわれの誰もがすることであり、どんな社会にも必ず見出される。約束は、発話行為の一種であるが、発話の時点から将来にわたって複数の人間に関わるるところから、（制度化された）時間をその隠された主題とする。

よくある約束の図式。AさんとBさんは、ふたりで大事な相談をしていたが、途中でAさんが急に用事を思い出す。そこで話をいちおう打ち切り、またあとで、相談の続きをすることにする。ここで、問題。「またあとで」とは、いつ、どこでなのか？ いきあたりばったりの偶然に任せていたのでは、AさんとBさんは、二度と逢えないかもしれない。よしんば首尾よく逢えたとしても、そのころには「大事な相談」も手遅れになっているかもしれない。そこで2人は、約束する。「あす、太陽がいちばん高くなったころ、同じこの場所で落ち逢おう。」そうすれば2人は確実に、のこりの相談を続けられる。

以上は、これ以上単純にできないぐらいに単純な、約束の図式である。だがそれでも、多少とも高級な人間の精神的能力を、いくつか要求するだろう。まず、約束したという事実を記憶していること。端から忘れてしまうようでは、約束は成り立たない。つぎに、約束を実行に移せること。約束を実行に移せるといっても、約束の内容である行為（上の例では、あす太陽がいちばん高くなったころ、例の場所にスタスタ歩いてくること）を実行できることとは異なる。ただ歩いてくるぐらいなら、誰にでもわけはなかる。そうではなくて、約束された行為を、当事者らをとるべく社会的文脈や自然的因果性への依存から切断・分離し、それだけで実行に移せることをいう。これは要するに、約束のなんたるかをよくわきまえているということにはかならない。

これらは、約束という行為を考えるうえで、本質的な点である。けれども、約束という出来事には、個々人の精神的能力（にもとづく行為）ということでは捉えきれない、プラ

ス $\alpha$ の部分がある。それは、2人を一様にとらえる時間、の観念である。

【30】約束という行為の下地となっていたのは、「あす」「太陽が高くなる」などといった、時間を表現する言いまわしであった。これなしでは、約束を交わすことができない。そして、こうした言いまわしが通用するということは、そこで表現された時間が、ことばをやりとりする当事者の誰をも一様にとらえる客観的なものだ、ということを含みする。「あす」というとき、わたしと同様あなたも「あす」をむかえる、ということが含意されている。「あす」がわたしだけ（あなただけ）のものであれば、両者の行為を指示する共通のパラメータとなることはできない。われわれの約束のなかでたしかに「あす」ということばは含みをもつが、それは、約束の両当事者（AさんとBさん）が同じ体外ジャイロに直面しているという事態の承認なのである。

「あす」ということばは、事象の記述ではない。「あす」にあたる出来事は、少なくともいま、どこにも実在していない。そうではなくて、「あす」とは、自分が時間をしていることの一表現である。太陽の日周運動＝体外ジャイロを前にして、その周期性を根拠に、自分の身体の内とは異なる有り様に関する予料を組み立てることができること、表現である。ただ「あす」ということばが用いらただけで、即こう言える。けれども、約束のなかでそれが用いられたときには、これにとどまらない。わたしだけではなくあなたも、時間をしていること、しかも同じことばによってそれを表現すること、までが含意されている。つまり、さきの図8の見取りが前提されているわけである。

わたしはここで、客観的時間の根拠づけや存在証明をしようとしているのではない。それらはたぶん、手掛けてもうまくいかない試みである。のべておきたいのはただ、約束という普遍的なタイプの社会的行為が、時間を表現する言いまわしを必ず下敷きにすること、そして、その言いまわしは、誰が発話者であるにかかわらず、約束の当事者に一様に受け入れられること、それだけである。

【31】時間を表現する言いまわしには、時間の観念が付着している。時間の観念といっても、なにも神秘的なものではない。特定の体外ジャイロに照準すれば当然ひきうけることになる、抽象的な知識のことである。「この日周運動（今日）に続いて、そのつぎ、そのまたつぎ、……の日周運動がやってくるだろう。」これから先の日周運動は実在しないが、その像ならば、体内ジャイロを用いて（＝抽象的に）捉えることができる。「そのつぎ、そのまたつぎ、……」といった日周運動の反復・継続は、神経回路上の周回に投影され、数える操作に置きかえられる。未発達な場合には、それは「あす、あさって、……うんと先」であろうし、数的な形象が発達する場合には、暦法とよぶにふさわしい体系性を帯びるようになるだろう。これらが、時間を表現する言いまわしのなかに刻みこまれ、その社会の時間観念の水準を確定する。

日周運動が体外ジャイロの第一の焦点となるのは当然としても、それがすべてであるわけではない。一方で、より長期の周期性が問題となる。すなわち、日周運動自体の周期性（日が長くなったり短くなったりすること、あるいは季節の変化＝年周期）がそれであって、天空の年周運動（地球の公転の仮象）と結びつけられる。これは、ずっと大口径のジャイロである。別に、月齢にもとづく中間的な口径のジャイロも、しばしば焦点となる。もう一方で、日周運動より短期の周期性にも関心がおよぶ。それには大別して2通りがあり、ひとつは日周運動を、数的な形象（影の長さ、角度、……）によって分割していく場合、もうひとつは、別の小さな周期性（水流、振子、……）によってそれを埋めていく場合である。

日周運動やそれより大きな周期性を刻むジャイロは、天体の運行にもとづくため、時間の観念を結ぶのにたいそう有利である。なぜならそれは、社会のどのメンバーにも、同じように目撃できるから。それに対して、日周運動を分節する小単位の設定のほうは、より規約的な性質が強い。そして、より明白な時間原基（時計）の設定を必要とする。

## 8 暦法・時法・時間の制度

【32】結局のところ、時間の観念の種別は、一連の体外ジャイロがどのように公認され配列されているか、ということに集約される。われわれは、その類型について、簡単に考察しよう。

われわれが日常しりうる周期性は、一般に多様である。そして、それら周期性を刻む多数の体外ジャイロは、必ずしも直接に結びつきを持たないまま自然界のなかに散乱している。（それらがのこらず互いに参照しあい共鳴しあうとみえるのは、われわれの体内ジャイロを通じてなのだ。）もしもこれだけのことしか考えられず、すべての体外ジャイロが同等に扱われるしかないならば、われわれが時間の観念を抱こうとしても、それが一定の時間の制度に結実するとは言えない。

諸々の体外ジャイロは実際、同等ではない。われわれの行為との接合の度合において、親疎がある。ある体外ジャイロは他にきわだって、重要な意味あいを有するであろう。それを決定するのは、われわれの生活形式である。日周運動は、ひとの生理的身体の周期性（睡眠）に喰いこんでいるため、どの社会でも扱いが重い。また年周運動も、自然界の季節的变化を通じてわれわれの行為をおおしく拘束するため、普遍的に重要である。ただ問題は、日周運動と年周運動とが必ずしも関係づかないことだ。また、この両者とその他のジャイロとの関係も、明白でない。

体外ジャイロがこのように混沌をきわめたままであっても、ひとは自分が時間をしてしていると信じることができる。けれどもこの信念は、積極的に表明できない。第1に、どの体外ジャイロに直面するかによって、ひとは異なった周期にさらされるはずである。第2に、たとえそのうちのあるジャイロからある時間感覚をえたとしても、それを他のひとに伝えるべきがない。「歯痛」などの私的感覚を例にあげて Wittgenstein がのべたとおりである。（唯一可能なのは、彼自身が律動的にふるまい、他者に対して体外ジャイロとなることであるが、その場合にはかえって、自分のふるまいを支配する明確な時間の観念があらかじめ必要とされる。）

ともに生きるひとびとが、互いの行為形態を整序させ、ひとつの生活形式を実現していることが、だから、ある時間観念が成立することの根拠である。ひとびとを共通に内属させる生活形式は、体外ジャイロのなかからあるものを選別し、それを手掛りにひとびとの行為に關説する。こうして生活形式は、それが選びとった体外ジャイロと接続する周期性を刻む。ひとびとが「時間をしてしている」という事実は、この生活形式のなかで確定し、客観的な時間観念に結実する。いまやそれに言及することも、その知識を前提することも可能である。

【33】時間が「社会的な」形象であることを、よくよく理解することが大切である。そのためわれわれは、＜言語ゲーム＞論を少々援用してみよう。

ある社会の生活形式が照準する、特定の体外ジャイロ（の一系列）。指示される対象それ自体は、太陽の日周運動であっても月のみちかけであっても、とにかく純然たる自然現

象であってかまわない。それを指示して時間をいみする、という言語ゲームの成立によって、それは社会的な形象である。ひとがゲームに内属するかぎり、まさしく自然の体外ジャイロは時間そのものにみえる。太陽は時間につれて運行する！ だが、彼がゲームのなかでそう見なければ、それは時間でもなんでもない。彼自身が体内ジャイロをかかえており、それを通じて時間をしてしている。だから彼は、体外ジャイロが時間をいみするということを理解するのであり、そこに時間をみるのである。こうした彼（ら）のふるまいは、社会制度の準位にある。

どんな社会も、その生活形式のなかに、少なくともひとつ、時間を制度化するための体外ジャイロを有している。それは、時間の言語ゲームのための、時間原基に相当する。ちょうど、ひとびとがいくら長さをしっけていても、それが長さ原基（本当のものさし）によって制度化されるまでは客観的な長さの観念にいたらないように、時間もまた、こうした制度ぬきには、ひとびとの間の明確な形象とはならない。だから（客観的な）時間とは、時間原基たる体外ジャイロに關説し、それを使いこなすひとびとのふるまい、以外のものではないのだ。

【34】さて、時間原基たる体外ジャイロが、色見本のようにただひとつであれば、話はこれでおしまいでよい。けれども、ある社会の生活形式が複数の言語ゲームから組みあがっていることもあり、時間の言語ゲームを張る体外ジャイロがいくつもみとめられるのは、よくあることである。これらを、時間の複言語ゲームとして整理する仕方が、暦法・時法といった時間の制度である。

暦法・時法は、われわれの制度では連続的だが、一般にそうとはかぎらない。そこでこれを別々にたて、日周運動を基礎に年周運動を導く算法を「暦法」、日周運動をより小単位に細分する算法を「時法」と称することにしよう。これらはなにをするかといえば、要するに、時間の言語ゲームを張る諸々の体外ジャイロの相互関係を整理し、秩序づけるのである。

こうして様々な時間の制度がえられる。その秩序づけの過程で、暦法に関しては種々の天体観測技法が、また時法に関しては種々の人工的体外ジャイロ（すなわち時計）が考案された。その実際はなかなか興味深く、思わず民族誌的な関心をそそられずにはおかないが、時間の原理的な考察に話題を限定する本稿としては、禁欲するほかない。

われわれの時間の制度の特徴は、一連の体外ジャイロを、その周期の数的な比例関係によって厳密に特定しようとするところにある。そこには、わが国でも江戸時代までのこっていたような「不定時法」の観念を容れる余地はない。時間はあくまでも均質・一様に、あらゆる体外ジャイロのなかを流れてゆく、と信じられている。そこで、そのなかからある体外ジャイロを時間原基に選び、他の体外ジャイロの周期を残らず計測せずにはおかない。精度を求め、時間原基はときに変更されるが、その変化は微小であるため、日周運動の周期が閏秒によって修正されても、われわれはほとんど気にもとめないほどだ。

## 9 微小時間の信憑

【35】すでに論じうるだけのことは、ほとんど論じたように思う。最後に、微小時間はどうみるかについて、私見をのべておこう。

時間が瞬間から成りたつこと。あるいは、時間が連続的(continuous)であるのか、それとも離散的(discrete)であるのか、という問い。——こうした設定を当然のこととする時

間観念が、従来の時間論に一連のパラドクスをもたらしてきた。冒頭に紹介したように、Newton の時間は数直線と相同なものであるが、数直線（実数）は実は、ユークリッドの想定とは異なり、経験と対応のつかない驚くべき性質をいろいろ具えている。だからわれわれは、時間は数直線と相同であるとか、瞬間（あるいは、極端な微小時間）からなるのかと考えることをやめたらどうだろうか。そうすれば、時間論のパラドクスに悩まされる必要もなくなるに違いない。

そこで問題は、逆に立てなおされる。そもそも時間がどこまでも微小に細分されるといふ信憑は、いったいどこからもたらされるのか？ この由来に見通しを与えたとき、ジャイロモデルにもとづくわれわれの時間理解も、いっそうの射程と説得性を獲得するはずである。

問題を解く鍵はふたたび、複ジャイロにあるだろう。精密に噛みあった2つの体外ジャイロを考えよ。一般に、その一方の周期は他より相対的に大きいであろう。これを反射的にみて、もう一方の周期が他より相対的に小さい、と言ってもよい。ここで、大なるジャイロの刻む時間の一単位を基準にとれば、小なるジャイロはそれを時間のより小さな単位に変換するかたちになっている。すなわち、複ジャイロは、より大きな時間の単位をより小さな時間の単位に変換するメカニズムだ、と考えることができる。

いま、ある時間の制度が成立している、としよう。そこには、それに規準を与える体外ジャイロが、少なくとも1つ存在するはずである。この体外ジャイロに噛みあうもっと小さな体外ジャイロを見つけることができれば（あるいは、見つからないなら、挿えることができれば）、件の制度の時間の単位は、もっと小さな単位に分割されたことになる。ここで（ひと回り小さな）体外ジャイロの実在と、（より微小な）時間の実在とが、同等視される。そうした小さな体外ジャイロが存在する以上、時間はもっと微小に流れていた、とみなされる。

日周運動を出発点（規準となる体外ジャイロ）にとろう。ひとびとはそれを根拠に日数を数える（たとえば、日の出から日の出まで）。もちろんひとびとは、時間が突然翌日に飛びうつたりするのではなく、もっとじわじわと進んでいくものであることをよく承知している。けれども、それを客観的に表明するためには、なにか日周運動を細分するにたる、万人に利用可能な操作を必要とする。それはたとえば、「ひとの影がひとと同じ長さになったとき」というような単純な方法であってよい。ただ、その場合は、一種の不定時法を採用したことになり、それをさらに細分してゆく途は事実上とざされてしまう。これに対して、日周運動を細分するのに、別な体外ジャイロ（時計）を使うことができたらどうか？ この場合には、その体外ジャイロの周期性を細分するまた別の体外ジャイロを、つぎつぎに発見していく途がのこされている。こうして、次第に微細な時間を刻んでゆくような、体外ジャイロの一系列が導かれる。それをどこまで辿ることができるかは、なかば技術上の問題である。

【36】時間は、よくあるの計時の単位に区画されつくすことなく、それらの間をじわじわ進んでいく。——こうした時間のとらえどころのない性質なら、どんな社会のひとびともしているはずだ。そしてこれは、われわれの確かな時間感覚でもある。

けれども、この事実と、“時間は、どんなに小さな計時の単位（体外ジャイロの周期）をもかいくぐって、いくらかでも微小に流れるであろう”という想定とを、区別しなければならぬ。後者の想定は、知らずしらずのうちに、われわれの時間の制度にへばりついている。だがそれは、われわれが時間について確かにしっていることではないのである。い

つの間に、こんな混入が起きてしまったのか？

これには理性が関与している、と思われる。理性とは、古代のギリシャ人が最初に駆使した思考の制度であった。彼らによれば、理性が純粹に働くのは、幾何学の領域である。そこでは、数直線の比例的な関係も扱われた。（理性とは実に、整数比ratioに通じる。）幾何学的な操作は、思考に対する規範としてふるまう。それはおよそ、考えうるかぎりのことから（内から）限界づける。すなわちそれは、「われわれがなにを<思考する>とよぶか」ということを定めるのである。

ところで級数は、理性によって考えることのできるものである。なんとなれば、級数とは数列の和であった。いま、分数（有理数）の列の和であるような級数を考えよう。これを、理性がつかむことができるか？ 有限な部分列の和であれば、通分して計算できる。無限であっても、等比級数であれば、その部分列の和の極限を求めることができる。

近代の計量的な理性は、分数（有理数）の全体を、数直線（実数）のなかに配置した。有理数はそこで、無理数に対して圧倒的に少数なのであるが、稠密に分布している。無理数は本来、理性（幾何学的＝代数的な操作）によっては捉えられないはずであったが、分数（有理数）の（有限）列によっていくらかでも接近できる。無理数はこうして級数と等置され、理性の対象につけ加えられる。このときに数直線（実数）の実在が信憑せられ、同時にその効果において、計量的な理性の対象が実在することも信憑されるにいたったのだ。近代的なみでの時間がこれである。

【37】時間があたかも数直線のように流れ、そのいたるところに微小な時間的差異が偏在する——このような信憑が出現するにいたる機制を、ジャイロモデルにそってもう少々のべておこう。

時間の制度が微小時間の信憑へむけて下降してゆくためには、周期をつぎつぎ比例的に分割してゆく体外ジャイロ（時計）の一系列が必要であった。これはあたかも、無理数への接近をはかる分数（有理数）の（有限）列のごとくである。

実際、1個の懐中時計でさえも、比例的に噛みあう歯車の一列によって構成されている。具体的な機械は、もちろん有限個の歯車によって組み立てられており、その精度の最小単位というものがある。けれども、その機械（時計）が奉仕する時間の制度は、そうした最小単位というものをもっていない。精度の最小単位は個々の時計にこそあれ、制度にはない、有限な時計は、むしろその限界を通じ、かえって時間そのものの微小な連続性を‘示して’いる、と信じられる。「秒針はたしかに、コチコチと動く。だが、秒と秒とのあいだで、秒針は文字板の空白を指していくではないか。」

周期的な現象のすべては、自然科学の要求に基づき、互いに測定し測定される関係に配列され、ひとつの網の目を構成する。測定する側にたつとき、それは時計として働く。周期の比例的な関係に従う時計（体外ジャイロ）の系列が、その社会の時間の制度を体現する。これが、全体として、測定されるべき時間の、比例的な級数関係に必ずしも従わない充満——時間の微小な連続性——を‘示す’わけだ。

【38】時間は、事象と事象とのあいだに孕まれる、ただの観念である。時間という名前の事象があるわけでも、時間に相当する現実が客観的世界のなかにあるわけでもない。

自然科学の測定手続きは、この点を見えにくくする。それによれば、時間は事象のパラメータであり、測定にききだつて事象を包んでいる。時計は、事象の至近に置かれるが事象に影響を与えないなにかであり、時計とその事象とのうえを同様に時間が流れすぎていくゆえに、事象の時間が時計によって測定されるのだ。事象を包む真実の時間がある

のであって、時計の示す時間はそれと、測定誤差の関係で繋がれている。

本稿の理解に即して言えば、これは仮象である。なるほど、時計は測定の手段として科学者の手許におかれ、説明しようとする現象をみる目からは見えなくなっている。けれども、時計もまた、測定される事象と同等なもうひとつの事象であるのだ。

測定される事象/時計。——両者は同等なふたつの事象である。だが、測定の枠組みのなかでは、両者は非対象な関係におかれる。時計のなかにもっばら理念的な時間が流れ、それが測定される対象のがわに一方的に投射される。理念的な時間が流れているという保証は、しかし、どこにもない。もちろん、理念的な時間の要求する微小単位は、われわれの時間感覚の及ぶる範囲を完全に踏みこえている。われわれは、自分たちが実感する現象の周期性が、体外ジャイロの比例的な連鎖により、時間感覚の及ばぬ十分小さな単位にまで分解されるのをしって、そうしたところで理念的な時間が流れていることを、ただ信じたのである。

時間の制度に外在する視点から、これをみたと想定すればどうであろうか？ 時計から——正確に言えば、比例的な周期に従って配列された体外ジャイロの網の目から——、理念的な時間が剥落する。あるいは、効力停止される。時間の制度に外在し、それでも時間をしているわれわれの目にうつるのは、周期的/非周期的にひたすら生起し続ける事象の単なる一群である。もと時計であった事象は、時間を指示するのをやめ、他の事象と比例的/無比例的に相関しながら。

(了 105枚)

#### 文 献

- 橋爪 大三郎 1979a 「記号空間=社会」,(未発表)。  
—— 1979b 「間身体的作用力論」,(未発表)。  
—— 1980 「歴史:局所と全域における」,(未発表)。  
—— 1985a 『言語ゲームと社会理論——ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルー  
マン——』,勁草書房。  
—— 1985b 「ダブル・リアリティ(二重の現実性論)」,(未発表)。  
—— 1985c 「間身体的作用としての芸術形式——平均律の閉塞/遠近法の解体  
——」,『記号学研究』5:81-95。
- 中村 元 1980 『ナーガールジュナ』(人類の知的遺産17),講談社。  
柳瀬 尚紀(訳・編)(Carroll,Lewis)『不思議の国の論理学』,朝日出版社。

"Time"  
by  
Daisaburo HASHIZUME  
1985:12

CN 197